

子どものころの遊び・子どもとの遊び

Play in childhood and play with children

石川県立大学 教養教育センター 矢野 喜夫

Abstract

University students recalled their own play experiences during childhood and adolescence. These experiences were then categorized into five types of play in order to investigate the actual conditions and development of them. Outdoor play reaches its maximum later in childhood, and develops into ball play and several other sports. Indoor play gradually grows in number throughout the later part of childhood and adolescence, by which time various kinds of card, board and video games are added. A majority of students admit that they like to play with children, yet at the same time, they are diffident about playing and interacting with them.

Keywords: child play; play with children; outdoor play, indoor play, traditional play, game

目 的

本学の人文・社会科学系教養科目の選択科目多様化・充実のために2013（平成25）年度より新設した「子どもの発達と遊び」（矢野喜夫・宮口和義 共同担当、2年生前期担当）は、これまで2年間実施経過した。筆者は、担当授業時に毎回、受講生に種々の主題でのミニレポートを書いて提出する課題を課し、成績評価の基礎資料にすると同時に、その一部を、青年期後期にいる受講生らの過去の遊び経験の実態調査資料とした。その遊び経験の実態調査データを集計し分析した結果の一部を、以下に呈示する。

方 法

〔調査内容〕今回分析対象とした調査資料は、(1)子どものころの遊び調査、(2)親やおとなとの遊び調査、(3)子どもとの遊び・つきあい調査である。

〔調査方法〕ミニレポート課題として、質問紙を配布して、印刷された質問や課題に回答させた。無記名ではなく記名であり、レポートとして大まかな評価をして受講生の成績評価の資料にすることを、予め伝えてある。回答は原則

として選択式ではなく、質問文に対する語句や文章による自由記述とした。

〔調査対象者〕石川県立大学2年生（2年間に渡る）最多時58名（男38名、女20名）

〔調査時期〕2013年および2014年4～6月

結 果

1. 子どものころの遊び

大学生が子どものころ、どんな遊びをしたか、記憶している遊びをいくつでも挙げて書いてもらった。調査用紙の教示文は、次の通りである。「幼児や小学生、中高生のころ、きょうだいや近所の友だち、園・学校の友だちといっしょに、よく何をして遊んだか、覚えている遊びを思い出せる限りいくつでも書いてください。ひとり遊びがあれば、それも含めて書いてください。」

子どもの時期を大まかに①幼児（小学校就学前）のころ、②小学生のころ、③中高生のころの3時期に分けて、挙げてもらった。最後の中高生のころは青年期前期中期であり、正確にはもう子どものころとは言えないが、現在の大学生の青年期後期にいたるまでの直近過去の時期として、敢えて指定した。

回答欄には「だれと（ ）と） 何の遊びを（ ）」という記入枠のある行を、幼児、小学生、中高生の各時期に8行ずつ設けて、一つひとつの遊びについて、遊び相手と遊びの種類の両方が、できるだけ明らかになるようにした。

(1) 遊びの分類

子どもの遊びの分類は、遊びの民俗学で言われている伝統的な外遊び、内遊び、軒遊びの3カテゴリーを適用する（柳田国男,1970,1976）。外遊びは文字通り、家の外の道路や空き地、公園などに子どもが集まって来て遊ぶ遊びであり、内遊びは家の中で少人数で遊ぶ遊びである。外遊びは、鬼ごっこや隠れんぼ、缶けり、泥けいなどのような、一般に運動量の多い活動的な集団遊びであり、内遊びは積み木や折り紙、ゲーム、人形・おもちゃ遊びのような、一般に家の中でする運動量の少ない遊びである。

外遊びは、年長児から年少児へと遊びが直伝的に伝承されているのに対して、内遊びはおとなや年上のきょうだいから伝える要素が多く、親による遊具の買い与えに依存する割合が高い。

外遊びは現代では、サッカーや野球、バドミントンのような球技スポーツのボール遊び、あるいはスポーツ一般に発展するので、それは他の伝統的な外遊びとは区別して、カテゴリーとして独立させる。内遊びも、現代ではトランプやカードゲーム、ボードゲーム、テレビゲーム、パソコンゲームなどのいわゆるゲーム類が優勢であるが、これは内遊びに含めたままにする。

軒遊びは内と外の間的位置である遊びで、家の敷地内や周囲の縁先や庭先、軒下などで遊ぶ、ままごとや砂・土遊び、草花遊びのような、比較的静かにおこなう遊びである。これも、家から少し離れたところにある砂場や野原であることもあるが、明確に砂場遊びとしているもの以外は軒遊びとみなす。これは現代では廃れつつある遊びだと推測される。

最後に、絵本や本を読んだり読んでもらったり、テレビやビデオでアニメやドラマ、映画を観ることは鑑賞であるが、これも広義には遊びに属し、古くから受容遊びと称されているので、これも一つのカテゴリーとする（Bühler, 1935）。

結局、得られた個々の遊びは、①外遊び、②ボール遊び、③軒遊び、④内遊び、⑤受容遊びの5カテゴリーに分類して分析することにする。

(2) 友だち・近所の子どもの遊び

友だちや近所の子どもの遊びとして複数列挙した遊びを、就学前の幼児期、小学生の児童期、中高生の青年期の各発達時期別に、それぞれ5カテゴリー分類したものが図1（幼児期）、図2（児童期）、図3（青年期）である。

各カテゴリーの遊び事例数を人数で割った一人当たり平均列挙数で見ると、図1の幼児期では、男女とも外遊びがもっとも多く、次いで内遊びが多く、軒遊びが3番目に多い。図2の児童期には、外遊びと内遊びはさらに増え、外遊びは児童期が最多となっている。しかし児童期では、

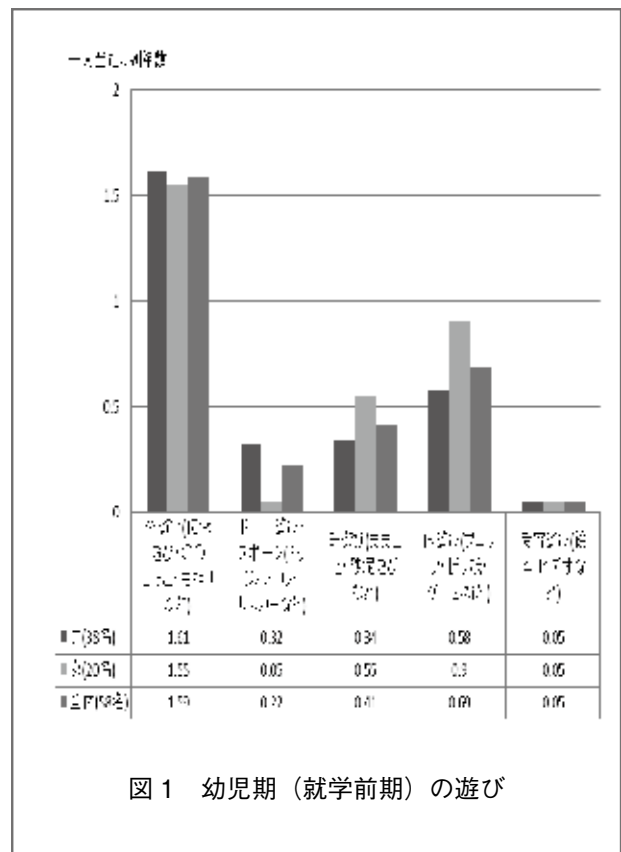
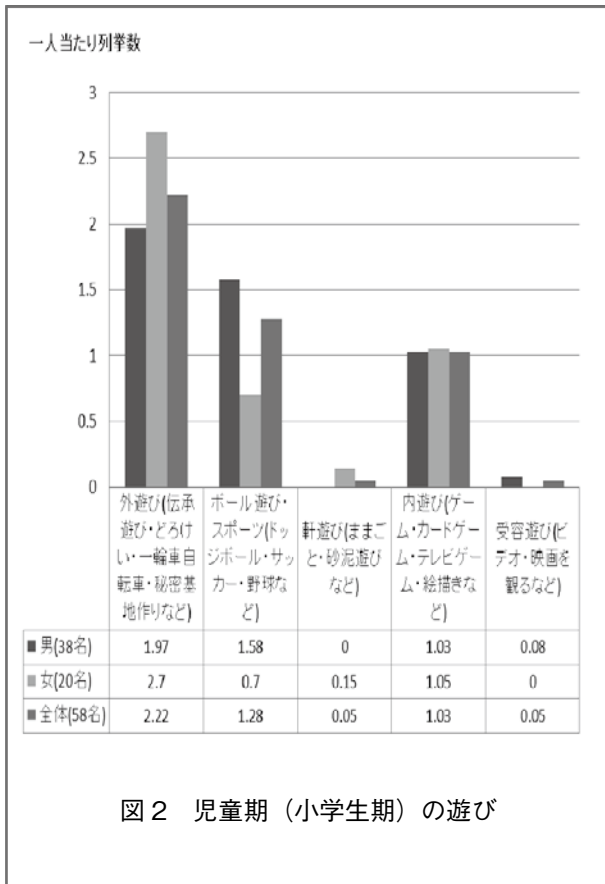


図1 幼児期（就学前期）の遊び



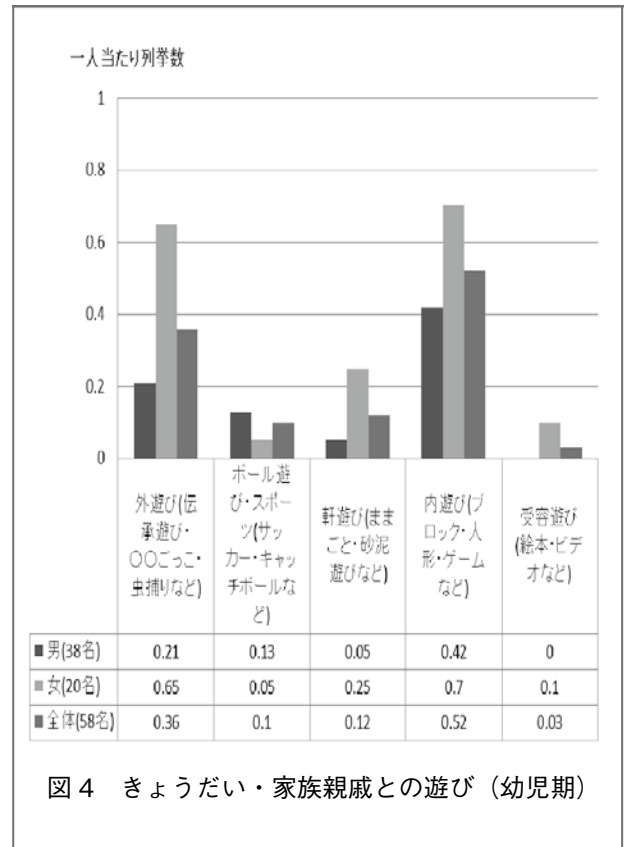
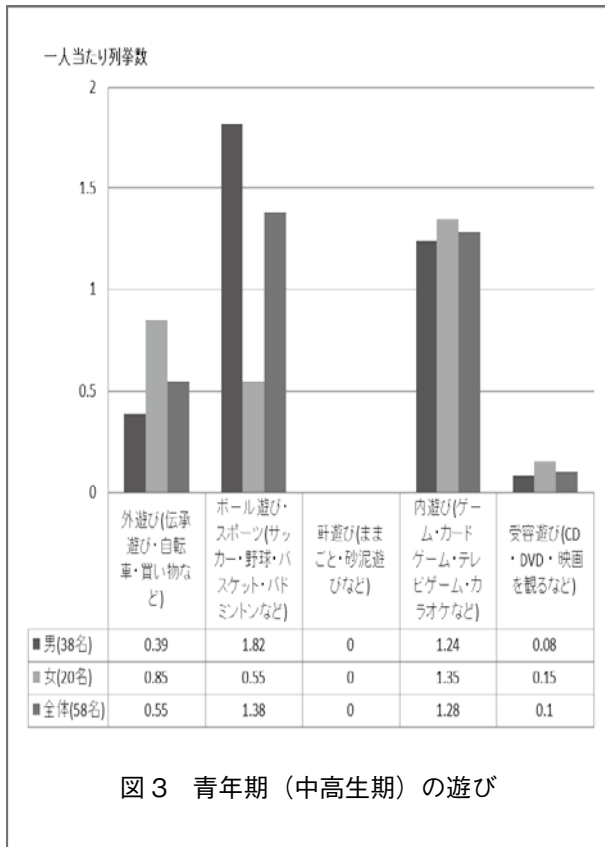
幼児期には少なかったボール遊び・スポーツが目立って増え、とくに男子では内遊びを抜いている。逆に軒遊びはほとんどなくなっている。

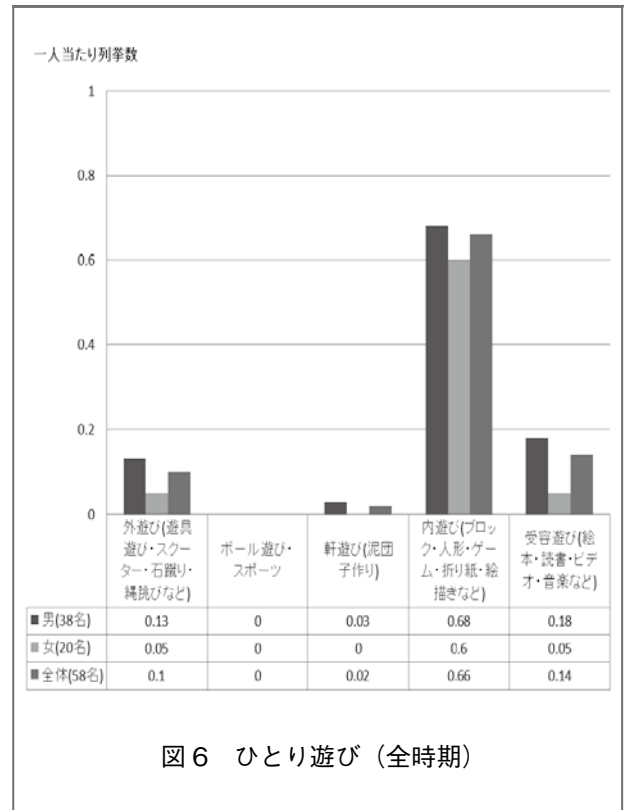
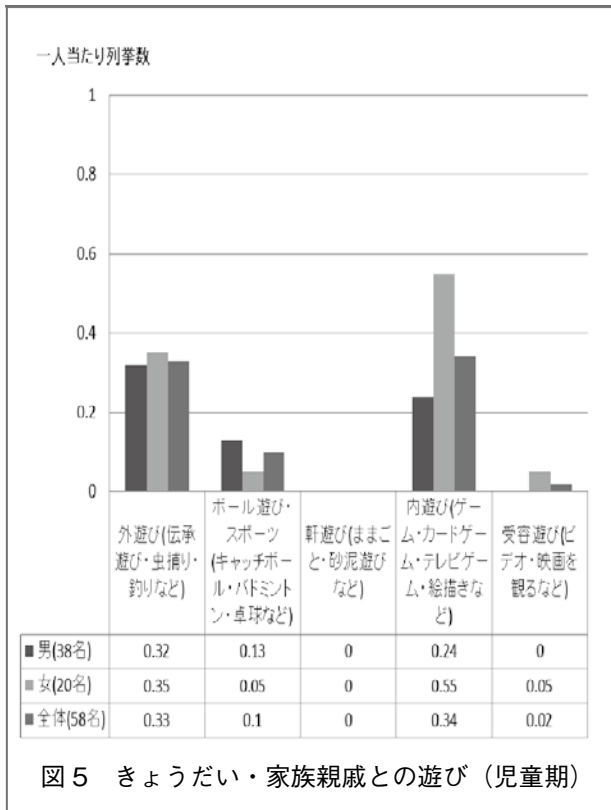
図3の青年期には、ボール遊び・スポーツがとくに男子で最多となり、そのために他の外遊びはむしろ減少している。その一方で、ゲームなどを含む内遊びは、男女とも児童期よりさらに増えている。軒遊びは完全になくなり、ビデオやCDなどの鑑賞を含む受容遊びが、いくらか増えている。

外遊びに含まれる遊びとしては、幼児期・児童期では鬼ごっこ、かくれんぼ、缶けり、どろけい、縄跳び、竹馬、虫取り、秘密基地作りなどの、昔からある伝承遊びが多く含まれている。その点では、伝承的な外遊びは絶滅危惧の状態ではないように思われる。中でも一番多いのは、鬼ごっこと隠れんぼであり、これらの伝承遊びは十分存続していることがわかる。

(3) きょうだい・家族親戚との遊び

きょうだいや家族親戚との遊びの数は、友だ





ちや近所の子どもの遊びの数に比べて比較的少なく、青年期にはほとんど挙げられなくなる。幼児期には内遊びがもっとも多く、次いで外遊び、軒遊びと続く(図4)。

これは友だち・近所の子どもの遊びに似た傾向であるが、内遊びが外遊びより多い点が異なる。また女子が男子より比較的多く挙げている点も特徴的である。

児童期についても、図5のように幼児期とほぼ同様に、内遊びが比較的多く、とくに女子で多いのは、きょうだい・家族親戚とのかかわりが家庭中心であることを示していると思われる。

(4) ひとり遊び

ひとり遊びが挙げられている数は、きょうだい・家族親戚との遊びよりさらに内遊びの割合が多い(図6)。これは、レゴ・ブロックや人形遊び、お絵描き、テレビゲームなど、ひとり遊びができる遊びが内遊び用であるものが多いことから見て自然である。またひとり遊びでは、絵本や本読み、ビデオ・音楽鑑賞などの受容遊びもいくらか見られる。

2. 親やおとなとの遊び

前の「子どものころの遊び」の調査の回答の中にすでに、同じくらいの年齢の相手(ピア)同士の遊びだけでなく、年上の人や親や祖父母との遊びが含まれているが、それとは別の調査として取り立てて、「親やおとなとの遊び」を問う調査を行った。

この調査用紙の教示文は、次の通りである。「幼児のころ、お母さんやお父さんはどんなことをして遊んでくれたか、覚えていることを書いてください。何歳ごろかわかれば、そのだいたいの年齢も書いてください。もっと大きくなったとき、こんなことをして遊んであげたと親が話していたことや、写真やビデオに残っていることでも良いです。どこかに行楽に連れていってくれたことや、絵本やお話をしてくれたりしてくれたことなどでも良いです。その他、おばあさんやおじいさん、他のおとなの人が遊んでくれたのを覚えていれば、それも書いてください。きょうだいや友だちとの遊びは省きます。」

この調査の回答欄は、①お母さんが遊んでくれたこと、②お父さんが遊んでくれたこと、③おばあさん・おじいさんが遊んでくれたこと、④他のおとなの人が遊んでくれたことに分け、それぞれに対して「() 歳ころ」という回答枠を4行ずつ付けた。

この調査は、発達時期を明記せずに書いているものがかなりあり、幼児期が中心で児童期は少なく、青年期はほとんどないので、3時期総合の結果を示す。また、この調査の2014年データ紛失のため、2013年データのみであるが、その結果が、図7(母との遊び)、図8(父との遊び)、図9(祖父母との遊び)である。

図7の母との遊びで相対的に多いのは、これまでの他の遊びで少なかった受容遊びで、これはとくに女子で、幼児期に絵本や本を読んでもらったという例が多いためである。また女子では、ままごとや人形遊びを含む内遊びがおおいのが特徴的である。男子の母との遊びは、公園やプールに連れて行ってもらったというような

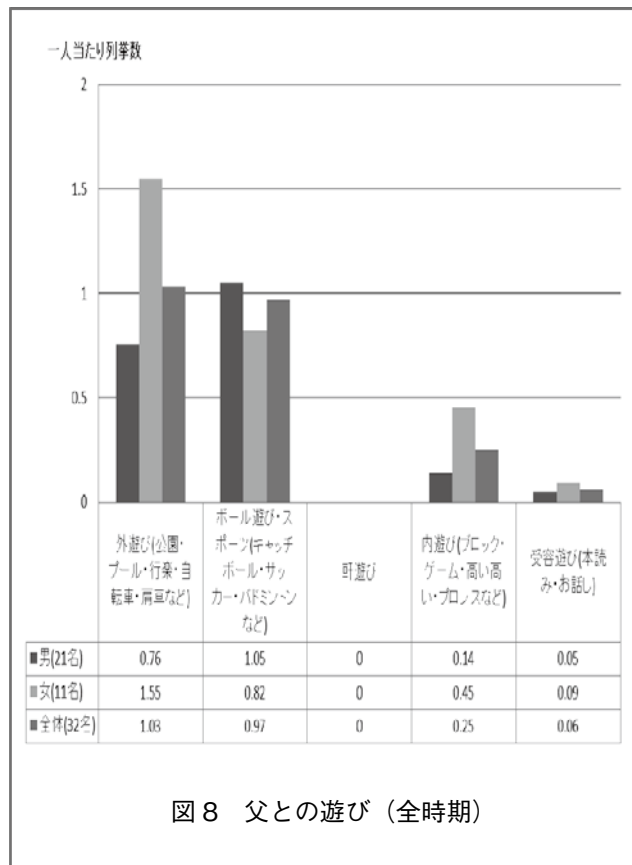


図8 父との遊び(全時期)

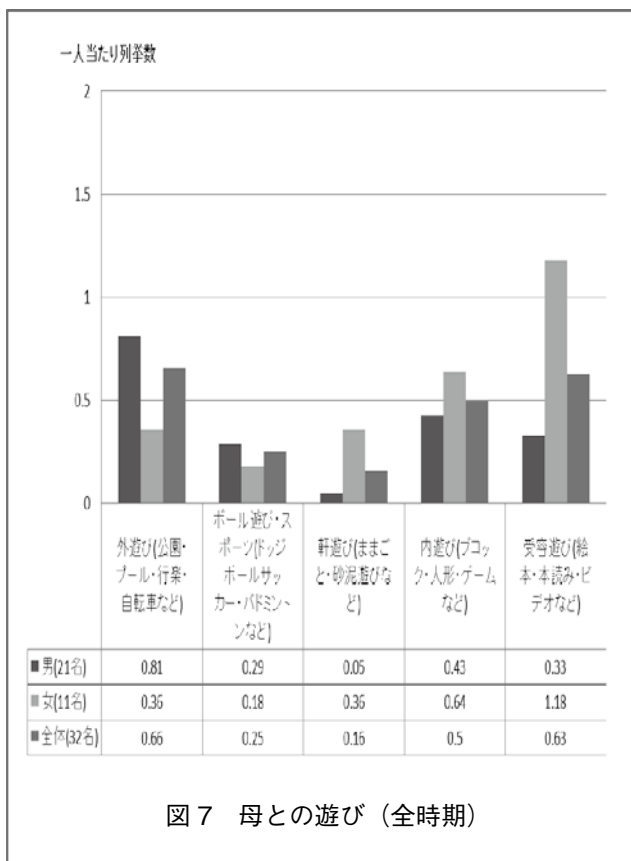


図7 母との遊び(全時期)

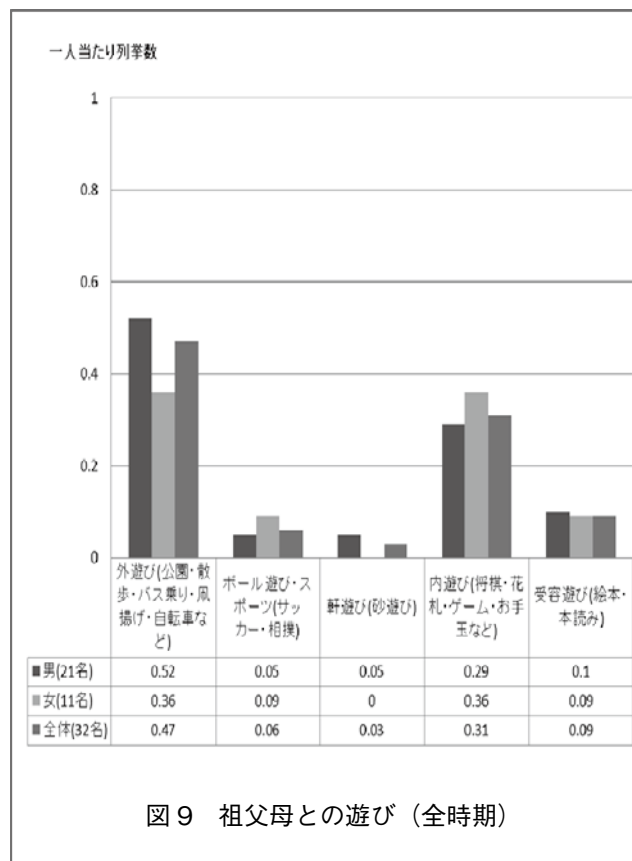


図9 祖父母との遊び(全時期)

外遊びが比較的多い。

父親との遊びでは男女とも、外遊びとボール遊び・スポーツが多い。外遊びは、公園やプール、釣りなどに連れて行ってもらったり、肩車をしてもらったという例が多いためである（図8）。

ボール遊びは、キャッチボールやサッカーをいっしょにしてもらったという例が多いことによる。肩車とキャッチボールは、父親独特の子どもとの遊びとして現れている。

図9の祖父母との遊びは、絶対的に数が少ないが、その中で多いのは公園や散歩、バスに乗ってデパートに連れて行ってもらったり、凧揚げをいっしょにしてもらったという外遊びと、将棋、花札、お手玉のような伝統的な内遊びである。祖父母を通じて伝承される遊びもあり、祖父母が子どもの遊びに果たす特別な役割もあることが推測される。

3. 子どもとの遊び・つき合い

子どもころの遊びとは立場を逆にして、自分が年長者として、あるいはすでに子どもではない者として、子どもと遊んだりつき合ったりした経験があるかという質問の調査を行った。また、子どもと遊ぶことの好き嫌い、および得意・不得意、自信・苦手かを質問し、さらに、子ども一般への態度や子ども観の質問もした。

教示文は次の通りである。「あなたは幼児や子どもと遊んだことがあるか。あれば、誰とどこでどんな遊びをしたか具体的に書きなさい。また、あなたは子どもと遊んだり、つき合うことが好きか苦手か、どれくらい自信があるか、なぜそうなのかその理由、あなたの子どもの一般に対する態度などを振り返って書きなさい。」

(1) どこで・どんな子どもと・どんな遊び

年長者として子どもと、どこで、どんな子どもと、どんな遊びをしたことがあるかの人数比の結果は、図10（どこで）、図11（どんな子どもと）、図12（どんな遊びを）の通りである。

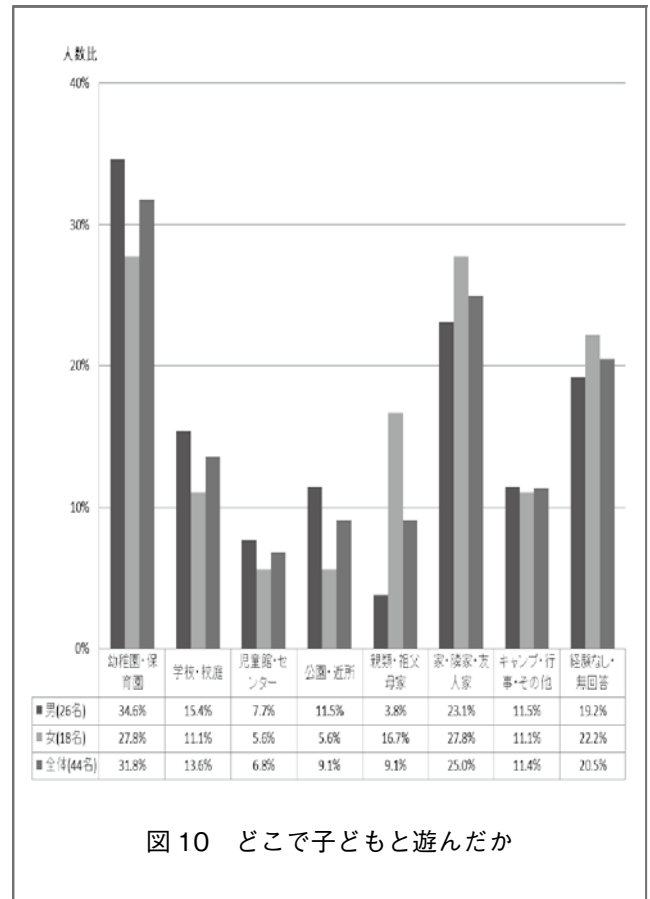


図10 どこで子どもと遊んだか

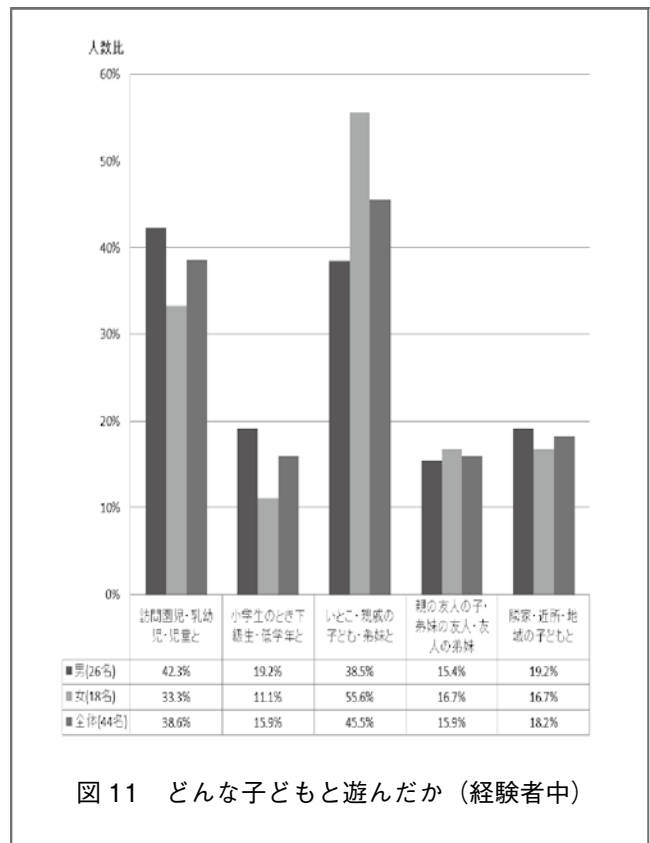


図11 どんな子どもと遊んだか（経験者中）

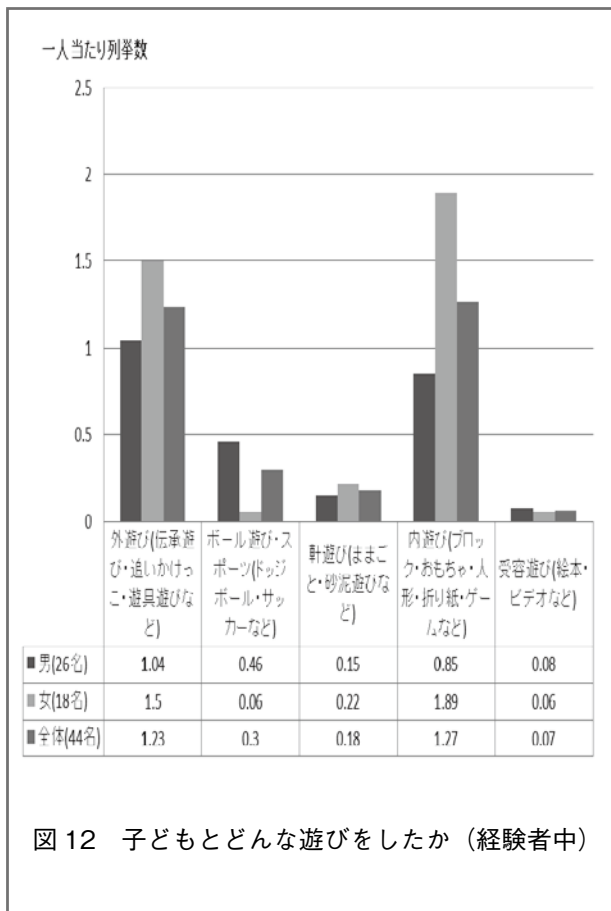


図 12 子どもとどんな遊びをしたか（経験者中）

子どもとどこで遊んだかでは、意外にも幼稚園・保育園が30%と最も多く、次いで家・隣家・友人の家が多い（図10）。前者は、中学・高校生のときの社会科・家庭科・職業科などでの、幼児体験実習や職業体験実習の機会によって、子どもと遊んだ経験なし、あるいは回答なしの者は20%程度であった。

子どもと遊んだ経験がないか回答なしの者を除いた経験者だけで、どんな子どもと遊んだかについては、いとこ・親戚の子ども・弟妹と遊んだ、というのが最も多い（図11）。これは、遊んだ場所では、親類・祖父母の家や自分の家に対応する。それと近いのが、親の友人の子ども・弟妹の友人・友人の弟妹という者である。青年は、このような何らかの係累で年少の子どもと出会い、いっしょに遊ぶ機会になっていることがわかる。

次いで比較的多いのが、中高生時の体験実習による幼稚園・保育園児である。自然な異年齢

接触を示す隣家・近所・地域の子どもの遊びや、小学生のときの下級生・低学年との遊びは多くはないが、一定程度あることがわかる。

子どもとどんな遊びをしたかでは、鬼ごっこや追いかけっこ、ジャングルジムなどの屋外遊具遊びなどを含む外遊びと、ブロック作りやおもちゃ・人形遊び・折り紙などの内遊びが比較的多い（図12）。これは体験実習で幼稚園・保育園を訪問したときの活動を、かなり反映していると思われる。

(2) 子どもとの遊び・つき合いの好き嫌い・自信度

上のような子どもとの遊びやつき合いを、青年期の人間はどのように感じているか、また子どもとの遊びやつき合いに対して、どれくらい自信を持っているかについての結果は、図13、図14の通りである。

子どもとの遊び・つき合いの好き嫌いは、好き・嫌いではないという肯定的な反応が約60%あり、あまり好き（得意）ではない・嫌い・苦手という否定的反応の約25%より多いとい

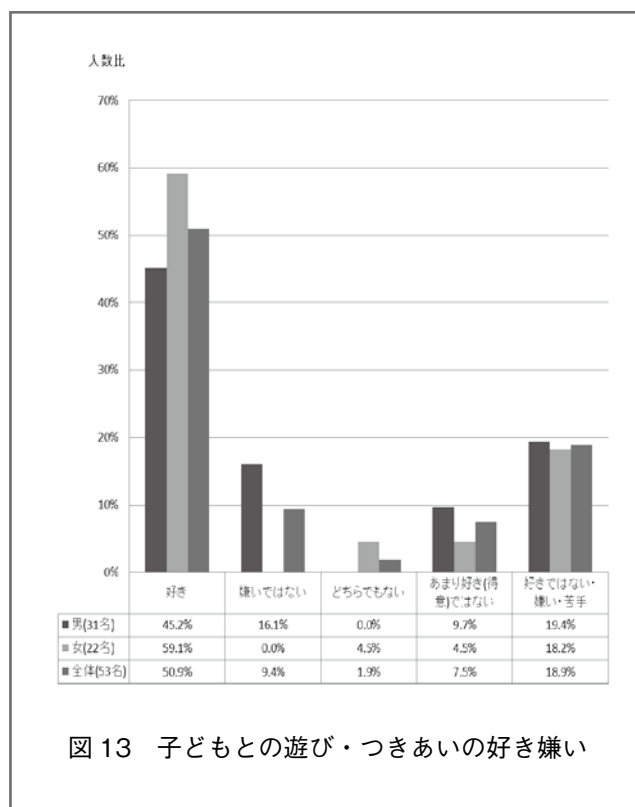


図 13 子どもとの遊び・つきあいの好き嫌い

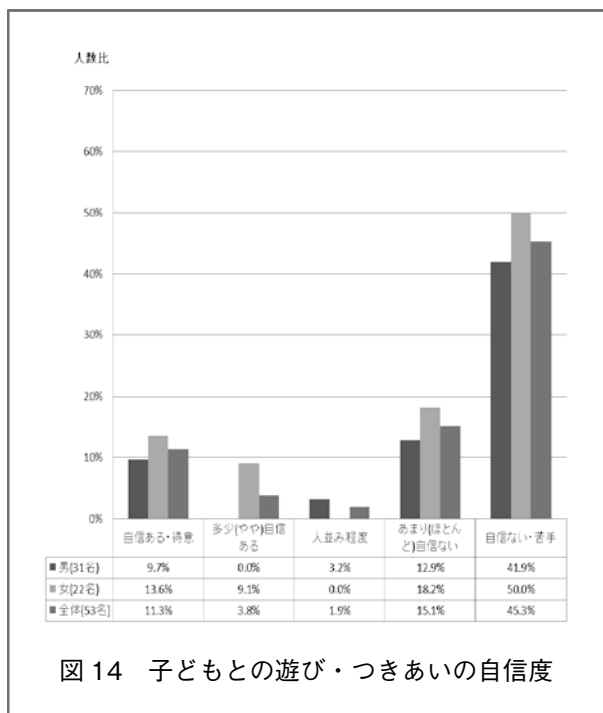


図 14 子どもとの遊び・つきあいの自信度

う結果である(図13)。とくに女子は60%近くの者が好きと答えている。

その一方で、子どもとの遊びやつき合いに自信があるかについては逆に、約60%があまり(ほとんど)自信ない・自信ない・苦手と答えている(図14)。このことから、子どもとの遊び・つき合いの好き嫌いと自信度は一致しないことがわかる。その理由としては、子どもと接した経験があまりないから、どう接したら良いかわからないとか、子どもは何を考えているのかわからない、行動が読めないなどという回答が多かった。

考 察

友だちなどの同年齢(ピア)同士の遊びでは、幼児期から児童期、青年期にかけて、外遊びの増加と減少、とくに男子でのボール遊び・スポーツへの収斂が見られた。また、内遊びの漸増と男女共のテレビゲームなどのゲーム類の増加という、現代的な発達の流れが見て取れた。

親や祖父母などのおとなとの遊びでは、女子と母親、男子と父親との同性間の独特の遊び関係があると同時に、男女によらず、母親の絵本・

本読み聞かせや父親の肩車、キャッチボール、どこかへの連れ行きなどのような、母親・父親それぞれに特徴的なかわりがあることが示唆された。祖父母も、子どものころ面倒を見てもらったというような育児面も含めて、どこかに連れて行くとか、昔からある遊びの伝承に、独特の役割を果たしていることが確認された。

子どものときにどのような遊びを、だれと一っしょにしたかという経験は、青年期以後成人期に直接には役に立っていないかもしれない。しかし、その遊びの知識と思い出は、たしかに個人の財産であると同時に、後進に継承されるべき文化財である。この財産は、個人が人生の荒波のなかで苦境や窮地に陥ったとき、自己を支えて踏みとどまらせる最後の生きる力となりうるものである。それは、子どもときの遊びが、楽しさや親しみ、愛情、生気に満ちた掛け替えのない経験だからである。

中高生になって以後の子どもとの遊びのかかわりでは、地域での自然な異年齢のかかわりが現代では少なくなっているのに対して、中学・高校での子ども体験実習・職業実習がその経験を補っていることが、調査結果から伺える。小学校での学年間交流の推進も、同様の効果を果たしていると考えられる。

子どもとの遊びやつき合いは好きであるという者が多い一方で、そのことに自信はないというものも多いという結果は、当然と考えられる。それは、青年は子どもの時期を脱して来て、成人を目の前にしてつねに前向きに生きているので、後ろの過去の姿を振り返る余裕はないからである。青年にとって、自分が抜け出てきた子どもという存在とは距離をおきたいという思いもあるかもしれない。実際、現代では子どもと接する機会は多くなく、その経験が少ないので、一っしょに遊ぶのは一般的に好きとは言っても、自信はないと言うのは当然であり、そう言うのは正直で謙虚でもある。いずれにしても、

おとなになれば、子どもとかかわる機会が増える時期が否応なく来るに違いない。そのとき、自分が子どものころに遊んだ経験や、親やおとなが遊んでくれた経験、自分が年長者として子どもと遊んだ経験が、大きな意味を持つてくるのである。

文 献

Bühler, C. 1935. *From Birth to Maturity*. Routledge & Kegan Paul.

柳田国男. 1970. 児童語彙解説. 定本柳田国男集 第29巻. 岩波書店.

柳田国男. 1976. 子ども風土記・母の手毬歌 (岩波文庫). 岩波書店.

[謝辞] 教養教育センター桶 敏教授とノリス ,G. 准教授から、それぞれデータ集計法と英文要旨について教示・助言をいただいたことを感謝します。